日本語動詞表現の研究

程 玲◎著

东南大学出版社
Southeast University Press

日本語動詞表現の研究

东南大学出版社
・南京・

图书在版编目(CIP)数据

日本語動詞表現の研究/程玲著．—南京：东南大学出版社，2010.12
ISBN 978-7-5641-2572-1

Ⅰ.①日… Ⅱ.①程… Ⅲ.①日语—动词—研究
Ⅳ.①H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2010)第 259675 号

日本語動詞表現の研究

著　　者	程　玲	**责任编辑**	刘　坚
电　　话	(025)83793329/83362442(传真)	**电子邮件**	liu-jian@seu.edu.cn
出版发行	东南大学出版社	**出 版 人**	江建中
地　　址	南京市四牌楼 2 号(210096)	**邮　　编**	210096
销售电话	(025)83793191/83794561/83794174/83794121/83795802/57711295(传真)		
网　　址	http://www.seupress.com	**电子邮件**	press@seu.edu.cn
经　　销	全国各地新华书店	**印　　刷**	南京新洲印刷有限公司
开　　本	850mm×1168mm 1/32	**印　　张**	11.875
字　　数	320 千字		
版　　次	2010 年 12 月第 1 版　2010 年 12 月第 1 次印刷		
书　　号	ISBN 978-7-5641-2572-1		
定　　价	25.00 元		

* 未经许可，本书内文字不得以任何方式转载、演绎，违者必究。
* 东大版图书，如有印装错误，可直接向发行部调换，电话：025-83792328。

まえがき

この本は日本語の文法の本である。

文法とは、文を作るための法、つまり規則のことである。

日本語ができるということは、日本語を聞き、話し、読み、書くことができるということであるが、その人の頭の中には、日本語を正しく理解し、使うためのさまざまの知識がつまっている。文法の規則もその中の一つである。

この本は、現代日本語の動詞をできるだけわかりやすく、体系的に説明しようとする本である。

この本の大きな特徴は、日本語教育を強く意識した文法書だということである。日本語学習者が日本語の文法を少しずつ身につけていくためにはどんな文法記述が必要なのだろうか、ということを考えながら書いた。つまり、日本語教育のための実用文法でもあることをめざした。

そのため、日本語教科書によくみられる、いわゆる「文型の積み上げ方式」にしたがって文法事項を説明していくことにした。学習がやさしい、基本的な文型から、だんだん複雑な文型へと進む。また、最初の予備的な説明は別として、初めから「文」を扱う。

この本は、読者として、日本語教育に関心のある、まとまった

文法の知識のない人を想定している。例えば、中学・高校で国語の文法(国文法・学校文法)をいちおうは習っていても、わかった気がしなかった、そしてまた、英語の時間に英文法を習い、その用語をいくつか記憶しているが、国語の文法との共通点および相違点がよくわからない、というような人である。

これまでにもいくつかの優れた文法書が出版されているが、それらを読んでも難しくてわからなかった人、あるいは記述が短くて物足りなかった人、そのような人たちにも満足してもらえるように、と思って書いた。

程玲

2009 年 1 月

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目　次

第一章　この研究に関する動詞 …… 1
1.1　基本的な動詞の表 …… 1
1.2　自動詞・他動詞 …… 2
1.3　動きの動詞 …… 3
1.3.1　動詞と時間 …… 3
1.3.1.1　「時に」 …… 3
1.3.1.2　（時から・時まで）・期間 …… 5
1.3.1.3　「時までに」 …… 6
1.3.1.4　「期間で」 …… 7
1.4　複合動詞 …… 8
第二章　動詞の活用 …… 11
2.1　活用 …… 11
2.1.1　「語幹」「語尾」 …… 11
2.2　丁寧体 …… 12
2.3　動詞の活用の型 …… 13
2.4　活用形 …… 15
2.5　学校文法の活用表 …… 16
2.5.1　学校文法の動詞活用表 …… 16
2.6　語幹の形 …… 17
2.6.1　マス形 …… 18
2.6.1.1　マス形の形 …… 18

2.6.1.2 「マス」の活用形 …… 19
2.6.2 中立形 …… 20
2.6.3 基本形 …… 21
2.6.3.1 基本形の形 …… 22
2.6.3.2 五段動詞と一段動詞の区別 …… 23
2.6.4 ナイ形 …… 23
2.6.4.1 ナイ形の作り方 …… 24
2.6.5 テ形 …… 25
2.6.5.1 テ形の作り方 …… 26
2.6.6 タ形 …… 27
2.6.7 タリ形 …… 28
2.6.8 タラ形 …… 28
2.6.9 バ形 …… 28
2.6.10 命令形 …… 29
2.6.11 意志形 …… 29
2.6.12 受身形 …… 29
2.6.13 使役形 …… 29
2.6.14 可能形 …… 29
2.7 普通形・丁寧形 …… 30
2.8 活用の例外 …… 31
2.8.1 敬語動詞 …… 31
2.8.2 テ形 …… 32
2.8.3 ～スル …… 32
第三章 イル動詞・－iru/－eruで終わる五段動詞・同音異活用の動詞リスト …… 33
3.1 イル動詞 …… 33
3.2 －iru/－eruで終わる五段動詞 …… 34
3.3 同音異活用の動詞リスト …… 36
3.3.1 辞書形が同形で活用の違う動詞 …… 36
3.3.2 「～ます」の形が同じで活用が違うもの …… 37

3.3.3 「～て」形が同じで辞書形の違うもの …… 37
第四章　動詞文 …… 39
4.1　動詞文について …… 39
4.2　主体（NがV） …… 41
4.3　方向・目的地（NがNへ/にV） …… 42
4.4　対象（NがNをV） …… 43
4.5　存在文（NにNがV） …… 45
4.6　［あるといる］ …… 47
4.7　移動の場所・出発点（NがNをV） …… 48
4.8　到着点・対象・変化の結果（NがNにV） …… 49
4.8.1　場所の「Nに」をとる移動を表す動詞 …… 49
4.8.2　対象 …… 50
4.8.3　変化の結果 …… 51
4.8.4　NがNにNをV/N**がNからNを**V …… 51
4.8.4.1　「人に ものを」/「人から ものを」 …… 51
4.8.4.2　「所/ものに ものを」/「所から ものを」 …… 52
4.8.4.3　「Nを（Nから）Nに」 …… 53
4.8.4.4　［NをNに］ …… 53
4.8.4.5　Nが（Nを）Nと/にV …… 54
4.8.4.6　NがNをNとV …… 57
4.8.4.7　対象（NはNがV） …… 57
第五章　動詞文型のまとめと補足 …… 60
5.1　動詞文型表 …… 60
5.2　動詞の意味を表わす助詞 …… 62
5.2.1　場所を表わす「Nで」 …… 62
5.2.1.1　「所で」 …… 62
5.2.1.2　「場所で」と「場所に」 …… 65
5.2.1.3　二重の「で」 …… 66
5.2.1.4　「所を」と「所で」 …… 66

5.3　時を表わす助詞 …… 67
5.3.1　「時に」 …… 67
5.3.2　「時から」「時まで」 …… 69
5.3.3　「時までに」 …… 70
5.3.4　「時で」 …… 70
5.4　期間を表す表現と「に」「で」 …… 71
第六章　やりもらい動詞のいろいろ …… 73
6.1　基本的な使用制限 …… 73
6.2　「人称」という考え方 …… 74
6.3　やりもらいの敬語動詞 …… 76
6.4　1人称扱い …… 76
6.5　目上に対して …… 77
第七章　自動詞と他動詞の対応 …… 78
7.1　意志動詞、非意志動詞 …… 78
7.2　形の対応の型 …… 80
7.3「自－自；他－他」の形の対応 …… 83
7.4　「－まる/める」 …… 84
7.5　自他の対応表 …… 85
7.5.1　『日本語文法ハンドブック』から …… 85
7.5.2　『新版 日本語教育事典』大修館 2005 …… 90
第八章　スル動詞の表現 …… 94
8.1　スル動詞 …… 94
8.2　「擬音・擬態語＋する」 …… 95
8.2.1　「擬態語＋する」 …… 97
8.3　「する」と「なる」 …… 98
第九章　動詞文の否定と疑問 …… 100
9.1　動詞文の否定 …… 100
9.1.1　否定の形式 …… 100
9.1.2　丁寧体の否定 …… 100
9.1.3　部分否定 …… 102

9.1.4　二重否定 …… 104
9.1.4.1　～ない(という)ことは/も ない …… 104
9.1.4.2　～なくは/も ない …… 106
9.1.4.3　V―ないでは/も　ない …… 106
9.1.4.4　否定と副詞 …… 107
9.2　動詞文の疑問 …… 108
9.2.1　疑問とイントネーション …… 108
9.2.2　丁寧体 …… 109
9.2.3　普通体 …… 110
9.2.4　～の(か)/のですか/んですか …… 112
第十章　動詞文の表現 …… 114
10.1　主体のない文 …… 114
10.1.1　[Nが] …… 115
10.1.2　[Nで] …… 117
10.1.3　[Nから] …… 117
10.2　対象(Nを・Nに・Nが) …… 118
10.2.1　[Nを] …… 118
10.2.2　[Nに] …… 120
10.2.3　[Nが] …… 121
10.3　相手(Nに・Nから) …… 122
10.4　恩人(Nに・Nから) …… 123
10.5　場所(Nに・Nで・Nを・Nへ・Nから・Nまで) …… 124
10.6　範囲(Nで) …… 125
10.7　時(N・Nに・Nから・Nまで・Nで) …… 125
10.8　相互関係(Nと) …… 126
10.9　仲間(Nと) …… 127
10.10　道具、手段(Nで) …… 127
10.11　原料、材料(Nで・Nから) …… 128
10.12　原因、根拠(Nで・Nに・Nから) …… 128

10.13　基準(Nで・Nに・Nから・Nより) …… 129
10.14　変化の結果(Nに) …… 129
10.15　様子(Nで) …… 130
第十一章　動詞文のテンス …… 131
11.1　状態動詞 …… 132
11.2　動きと状態 …… 133
11.2.1　動きの動詞の現在形 …… 134
11.2.2　動きの動詞の過去形 …… 135
11.2.2.1　過去形のさまざまな用法 …… 136
第十二章　動きの動詞の分類 …… 138
12.1　V－ている …… 138
12.1.1　継続動詞(進行中の動き) …… 140
12.1.2　瞬間動詞(動きの結果の状態) …… 141
12.1.3　その他の用法 …… 143
12.1.3.1　習慣・反復 …… 143
12.1.3.2　経験・記録 …… 143
12.1.3.3　単なる状態 …… 143
12.1.4　特殊動詞 …… 144
12.1.5　自他と「ている」 …… 145
12.1.6　変化動詞 …… 145
12.1.6.1　対象変化動詞 …… 147
12.2　V－てある …… 148
12.2.1　NをV－てある …… 151
12.2.2　自動詞＋である …… 152
12.2.3　否定の形 …… 152
12.2.4　[テイルとテアル] …… 153
12.3　する・した …… 154
12.3.1　状態 …… 154
12.3.2　継続 …… 155
12.3.3　瞬間 …… 157

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

12.3.4　変化 …… 158
12.3.5　完了 …… 158
12.3.6　「タ」と「テイル」 …… 161
12.4　V－ておく …… 164
12.5　V－てしまう …… 166
12.5.1　否定の形 …… 168
12.6　V－ていく・てくる …… 168
12.6.1　独立 …… 168
12.6.2　並行 …… 169
12.6.3　行き方・来方 …… 169
12.6.4　動作の方向 …… 170
12.6.5　時間的な方向 …… 170
12.6.6　動詞の意味による制限 …… 171
12.7　複合動詞 …… 172
12.7.1　動きの始まり …… 172
12.7.2　動きの継続 …… 175
12.7.3　動きの終わり …… 176
第十三章　動詞文型に関する各説の紹介 …… 177
13.1　寺村秀夫(1982)の文型表 …… 177
13.1.1　寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 …… 177
13.1.2　寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』(1982)から …… 180
13.2　森山卓郎(1988)の文型 …… 187
13.3　村木新次郎の叙述素 …… 195
13.3.1　村木の新しい論文から …… 206
13.3.2　村木新次郎「格」から …… 208
13.4　福島健伸　ニ格とテイル …… 211
13.5　IPAL 動詞辞書の文型の紹介 …… 212
13.6　IPAL 文型リスト …… 215

13.7 『文法ハンドブック』動詞文型 …… 222
13.8 『現代日本語文法2格と構文　ヴォイス』(2009) …… 223
13.9 共起格助詞の組み合わせ型の例(項目執筆:仁田義雄) …… 228
第十四章　国語辞典の動詞文型表示の紹介 …… 231
14.1 新明解国語辞典　第六版　動詞文型 …… 231
14.2 小学館『日本語新辞典』(松井栄一)の動詞文型 …… 233
14.3 『日本語基本動詞用法辞典』小泉他編大修館書店(1989) …… 236
14.3.1 分析の詳しい例「あがる」 …… 240
14.3.2 「は・が文」と「{が/は}」という表記について …… 241
14.3.3 「動詞用法辞典」について …… 243
14.4 基本動詞の紹介 …… 252
第十五章　基本動詞のリスト …… 322
15.1 『分類語彙表』 …… 322
15.2 基本的な動詞 …… 330
15.3 スル動詞 …… 341
15.4 複合動詞 …… 342
15.5 記述順 …… 343
あとがき …… 354
参考文献 …… 355

第一章　この研究に関する動詞

1.1　基本的な動詞の表

次の節から、日本語教科書の初めのほうで出されることが多い動詞の補語の型を、そこに使われる助詞に注目しながら見ていくことにする。(「動詞の補語の型」をかんたんに「動詞型」と呼ぶ場合もある。)

その前に、これからとりあげる動詞の主なものをここであげておく。一応のグループわけをした形で並べておく。それぞれがどのような型としてまとめられたものか考えてみて下さい。これらはすべて非常に基本的な動詞ばかりである。

1	起きる、寝る、働く、遊ぶ、休む、笑う、泣く、怒る、死ぬ 降る、吹く、咲く、鳴る、鳴く、開く、閉まる、割れる、壊れる、始まる、終わる
2	行く、来る、帰る、戻る
3	食べる、飲む、吸う、見る、読む、書く、聞く、勉強する、愛する、洗う、切る、着る、持つ、取る、撮る、作る、打つ、割る、壊す、殺す、呼ぶ、開ける、閉める、始める、終える、止める、する
4	いる、ある
5	歩く、走る、通る、渡る、泳ぐ、飛ぶ
6	出る、離れる、降りる
7	入る、乗る、座る、住む
8	勝つ、負ける、答える、成る、変わる
9	あげる、渡す、教える、貸す、(手紙を)書く、(電話を)かける、見せる

10	もらう、借りる、習う、聞く
11	買う、取る、盗む
12	置く、のせる、掛ける、入れる
13	取る、おろす、出す
14	選ぶ、変える、する
15	結婚する、けんかする、別れる、会う
16	話す、相談する、約束する
17	並べる、間違える
18	できる、わかる、ある(所有)、見える、聞こえる、要る、(時間が)かかる

1.2　自動詞・他動詞

動詞の分類でまず思いつくのは、「自動詞」と「他動詞」であろう。

日本語の場合、「自動詞」の定義は、「他動詞」でないもの、という消極的なものである。では、「他動詞」は何かと言うと、「対象としての「Nを」を補語にとる動詞」である。したがって、自動詞とは「対象としての「Nを」を補語としてとらない動詞」である。例をいくつかあげておく。

他動詞

本を読みます　　テレビを見ます　　問題を考えます

パンを食べます　　食事をします　　問題を作ります

自動詞

7時に起きます　　学校へ行きます　　こどもが生まれます

次のような「移動」を表す動詞は「Nを」をとるが、自動詞とするのがふつうである。

歩道を歩きます　　川を渡ります　　家を出ます

これらの「Nを」は「場所」であって、「対象」とはいえないと考えるから。

さて、ここまでの話だけなら、自動詞と他動詞を分ける意味

はたいしてない。「対象を」をとるという一つの動詞の型にすぎないから。しかし、他動詞というものをわざわざ特別にたてるには、もう少し理由がある。

まず、典型的な他動詞は「直接受身」になるということがある。受身については「25.1 受身」でくわしく見るので、ここでは議論しないが、受身を分類した中の一つに、「直接受身」というのがあり、他動詞はこの受身を作ることができるというのである。

これにはいろいろと問題があり、私はこの議論に賛成できないが、ともかく、他動詞の特徴と言われる。

もう一つ、日本語には次のような自動詞と他動詞の対がたくさんある。

ガラスが割れました　　ガラスを割りました

くわしくは「自動詞と他動詞の対」でまた見る、これらの対が一つの体系をなしているので、日本語でも自動詞と他動詞という分け方をしておくと、この対の説明がしやすくなる。

以上の話はあとの議論を少し先取りした話なので、あまり気にしないで下さい。英語などと同様に、日本語にも自動詞と他動詞という分け方があるんだというぐらいに軽く考えていてかまわない。

1.3　動きの動詞

動きの動詞は、瞬間的な動き（変化）を表す「瞬間動詞」と時間的長さのある動きを表すことができる「継続動詞」の二つに大きく分けられるが、両方の用法を持つものもたくさんある。とりあげた「時の補語」との関係を見てみる。

1.3.1　動詞と時間

1.3.1.1　「時に」

まず、「時に」　とともに使われる動詞は多くある。

2時に　始まる/出発する/帰る/変わる/死ぬ

日曜日に　勉強する/働く/本を読む/犬小屋を造る/雨が降る

「2時に」は瞬間を表すから、それとともに使われる動詞は瞬間的な動き、あるいはある長さを持つ動きの始まりまたは終わりを表す動詞である。

(1) 私は朝9時に会社に行って、夕方5時に帰ります。

(2) 父は夕方5時に会社を出て、6時にうちに帰ります。

「帰る」は、上の例では1時間を要する動作である、「時に」とともに使われると、その初めか終わりの時点の行動を表す。

このような、瞬間的な動き(「変化」を含む)動詞を「瞬間動詞」とする。

同じ「時に」でも、「日曜日に」の場合は、継続する動きの動詞も使える。

時間の幅そのものを指すのではなく、あくまでも全体を一つのまとまりとして見なしている。

動詞の示す事柄は、その中で起こるのである。「アイダ」と「アイダニ」の違いに似ている。

(3) 江戸時代の270年の間に、商業が発達した。

(4) 江戸時代の270年の間、徳川家が日本を支配した。(×間に)

どちらもその期間の全体を指すのであるが、「に」があると、その中で起こったことと見なされる。だから(4)の例では合わない。

さて、初級の学習者の作文に次のような誤用が出ることがある。

(5) 私は今日6時に起きて、7時に朝ごはんを食べました。

(6) 8時に学校へ行って、9時に勉強をしました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com